

半世紀も続く交流・尼崎 市立養護学校創立五十周年 記念式典に参加して

学校長 市原 潤

(記念式典挨拶より) :

さて、両校の交流のそもその始まりは、御校開校記念運動会に生徒さんの飛ばした風船とそれに付けられた手紙が、私どもの職員の手に着いたことでした。当時傍陽分校に勤務する六川先生は、烏帽子岳の登山道で雑木林の中の赤い風船を見つけて拾ったのでした。風船に付けられた手紙を読んで、先生は返事を出しました。それを聞いて分校の生徒たちとこちらの生徒さんたちと文通が始まり、この生徒同士の交流が先輩から後輩に受け継がれました。

やがて手紙は毎年秋、林檎の実る頃に林檎の定期便となって続きました。分校は昭和三十九年に閉鎖され

ましたが、定期便は本校の生徒会の手に移って、続けられてきました。いくつもの幸運な偶然が重なって、交流が始まり、嬉しいことにそれが五十年間続いているのです。

風船があの日にあの場所に落ちたので、あのときにあの場所を先生が通ったので、生徒たちが先生にならって手紙を出したので、またこちらの生徒さんが返事をくれたので、誰かが林檎を送ろうと言いついて、代々の引継ぎによって、…この交流は今まで続いてきたのです。どこかが欠けていけば、交流はそのときに途絶えてしまったのです。

しかし、偶然は最初だけでした。続けようという気持ちによって、次から次へと個人の経験が重ねられ、それはやがて学校の経験になりました。そうして、今日生徒とともにご招待いただいたことが、また一つ新



尼崎養護学校の生徒と本校生徒会役員

しい記憶を作りました。それだけでも私は素晴らしく貴重なことに思います。

遠く離れた二つの学校が林檎の定期便を通して繋がっていること、また、今日のように、時に特別な経験を共有すること、そんなつながりが、次の五十年に向けて始まり、いつまでも続くことを願っています。

(平成二十年十月四日)